

Katherine Mansfield の “The Woman at the Store” とポストコロニアリズム

榊 原 理枝子

ニュージーランド辺境を旅する3人が馬の傷の塗り薬を買うために店に立ち寄ろうとする。旅人たちのうちの一人 Hin の昔馴染みの男が妻と営んでいる店である。店に到着してみると主人はいない。羊毛刈りに行っていると妻は言う。この女が、Katherine Mansfield (1888-1923) による短編小説 “The Woman at the Store” (1912) の主人公である。この女主人公が今度のクリスマスで6歳になるという娘 Els と暮らしている小屋 (whare⁽¹⁾) の一室⁽²⁾ は次のような様子である。

It was a large room, the walls plastered with old pages of English periodicals. Queen Victoria's Jubilee appeared to be the most recent number — a table with an ironing board and wash tub on it — some wooden forms — a black horsehair sofa, and some broken cane chairs pushed against the walls. The mantelpiece above the stove was draped in pink paper, further ornamented with dried grasses and ferns and a coloured print of Richard Seddon. (12-13)⁽³⁾

小屋の住人とイギリス／ニュージーランドという二つの国家との政治的、歴史的な関係性と心的距離感がここに書き込まれている。1887年6月21日の Queen Victoria 在位50年祝典である Golden Jubilee, 1897年6月22日の在位60年祝典 Diamond Jubilee はそれぞれ盛大に行われ、内外にその大英帝国の繁栄と女王の栄光を印象付けた。Golden Jubilee を機に初めて各植

民地代表が召集され植民地会議が開催される。この会議は 19 世紀末、イギリスが帝国主義政策を推進する過程で、本国と植民地を経済的・軍事的に強く結合させるためのものであった。Diamond Jubilee では大英帝国の各地から代表を集めて大英帝国の結束を誇示した。引用箇所は Jubilee が 1887 年のものか 1897 年のものかは特定されていないが、いずれにせよイギリス帝国主義の繁栄を象徴する式典であり、ニュージーランドの辺境のこの小屋に、その式典の様子を報じた雑誌が貼られているということは、宗主国／植民地といった主従関係、植民地在住民のイギリスへの帰属意識、そしてまた帝国の母としてのイギリス女王への心的依存と忠誠が顕在であったことを示唆している。しかしながら、これらの雑誌のページはすでに古くなっている。もっとも最近のものでも新しくとも 1897 年のものであり、今や小屋の住人の精神的支柱は、カラー肖像におさまっている Richard Seddon である。彼は 1893 年から 1906 年の死亡までニュージーランドの首相を務め、国民の支持が厚かった。植民地民の大英帝国民という意識が薄らぎ、かわってニュージーランド国民であるという国家意識が高まっていることが示され、この部屋の様子はイギリス／ニュージーランドをめぐるポストコロニアル的な視点を読解に持ち込むことを誘っているのである。

しかしながら、このような関心からの読解は長らくされてこなかった。ロンドンの文芸誌 *Rhythm* に寄せられたこの短編の原稿を見て編集者の John Middleton Murry は絶賛した (“Katherine Mansfield” 55)。だが当時のロンドンの読者には、この作品を含む “Ole Underwood”, “Millie” 等のニュージーランド小説は理解されなかったという (Hanson & Gurr 37)。しかし *The Times Literary Supplement* の 1926 年の無記名記事 (*Katherine Mansfield's Stories* 50)、そして 1928 年の Edward Wagenknecht による *The English Journal* の記事では叙述の巧みさと物語の醸し出す恐怖が評価されている (23)。Murry は、1935 年にアメリカで行った講演を後に評論にまとめ、“The Woman at the Store” には、*In a German Pension* に描かれているものと同種の人生への幻滅がより強力に描かれていると言っている (“Katherine Mansfield” 53)。1951 年、Sylvia Berkman は主人公の女の境遇の辛さの描き方とプロット展開を評価している (48)。1954 年の Ian A. Gordon の論では、殺人や暴力を扱った荒廃した植民地の物語は、当時のイギリスの読

者が考えがちな植民地のイメージであったと言っている (*Katherine Mansfield* 10)。同年の Antony Alpers は厳しい環境と人間の心理に着目している (*Katherine Mansfield* 192-93)。“Millie”, “Ole Underwood”, “The Woman at the Store” の植民地ニュージーランドを舞台とした3作は、Mansfield がヨーロッパの作家となることで克己した軌跡を示している。C. K. Stead は1977年の論で指摘し、さらに “The Woman at the Store” を、辺境での辛い生活で夫に虐待された妻がついに彼を殺害するに至るというスリラーと社会ドキュメンタリーの合体と見ている (158)。1983年、C. A. Hankin はこの短編に厳しい生活環境に起因する人間の孤独を読み取り、Mansfield がその主要な作品で初めてニュージーランドを回想し主題としているという点で “The Woman at the Store” は画期的だと指摘し (73-74)、環境としての植民地の奥地に着目しているが、政治的な側面は強調していない。同じく1983年、Els が絵を描くということに表現者としての面を見ている Susan Gubar (196) の論がある。1990年、J. F. Kobler はこの作品の自然主義的傾向 (14, 58) と孤独、労働に押し潰された主人公の人間像に着目している (63)。Saralyn R. Daly の1994年の論考では、プロット、伏線、物語展開を評価しつつも、Mansfield が謎解き譚よりも、主人公の女の孤独とつらい生活の結果に関心があると考えている (30-31)。1999年の W. H. New はこの作品の小説技法に着目し (25, 77, 121)、Mansfield がこの作品以降ほとんどとらなかった方向でのプロットの実験を行ったことを指摘している (43)。主要な論考をこうして概観するだけでも、“The Woman at the Store” はポストコロニアルな読解よりも物語としての巧みに重点が置かれた読みが近年に至るまで主流であり、舞台であるニュージーランド辺境は、政治的な読解を誘う場というよりも、主人公の女の置かれた過酷な環境要因としての捉え方がしばしばなされてきたことが分かる。

決して主流とは言えなかった植民地主義の角度からの “The Woman at the Store” 論を見てみると、Angela Smith は女の店の “Camp Coffee”⁽⁴⁾ の広告に関して、そのトレードマークが植民地インドを髣髴させるものであり、舞台設定として帝国主義を意識させると指摘しているし (93-94)、また、Lydia Wevers は植民地の物語のコンテキストで “The Woman at the Store” を “Millie”, “Ole Underwood” とともに論じ、主人公の女が美女か

ら殺人者へ変容したこと、また、語り手が女性であるということで、植民地物語の伝統様式が脱構築されているということを指摘し (44-45)、Pamela Dunbar は植民地を舞台とした男性的な物語という前提を、語り手が女性であるということで転覆させていると言っている (47)。だがテキストが脱構築しようとしているのは、イギリス文学の伝統でもあるのではないか。Dunbar は、“The Woman at the Store” における「石筆を石版のうえに走らせる音」(7) で囀っている雲雀が、イギリスロマン派の詩人の描くそれらの対極にあるということを、また、Els の狂気を感じさせる様子と、「狂人の器用さ」と語り手に言わせしめた Els の絵に、それぞれ子どもの無垢、芸術の神聖という伝統的概念への攻撃を、さらに登場人物の「白さ」が、当時の言説に見られた白人の「人種的優越性」の記号ではなく、旅人の Jo の場合は道化の顔、Els に関しては病気との連想で表象されるということに言及し、既成の価値観が転覆させられているということを指摘している (45-47)。“The Woman at the Store” が試みているのは、これらの文化的記号の破壊だけではなく、イデオロギー的に帝国主義と連続していた文学ジャンルである冒険小説を、パロディ化することによるイギリス文学の伝統様式の転覆でもあるということを、この物語にポストコロニアル⁽⁵⁾ な姿勢で取り組むことによって、これから示していきたい。

The Life and Strange Surprizing Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner (1719) を初期の代表作とする冒険小説というジャンルは、帝国主義の発展に伴ってブームとなり、19 世紀末から 20 世紀にかけて、*Treasure Island* (1883), *King Solomon's Mines* (1885), *Allan Quatermain* (1887), *The Coral Island* (1885), *Lord Jim* (1900) などの冒険小説が次々と表れる。冒険小説と帝国主義が密接な関係にあることはすでに批評的常識となっているが、この点を Andrea White による冒険小説と帝国主義の分析で確認しておきたい。すなわち、文学のジャンルとは現実社会を反映するものであり、19 世紀においてイギリス帝国主義の発展と冒険小説の興隆が時を同じくしているのは偶然ではない。が、20 世紀に入り、帝国主義への絶対的な信頼が揺らぎ始めると、冒険小説も Rider Haggard らの帝国主義への心酔を表明したものから、帝国主義への態度の変化や往々にして単純ではない帝国主義への思いが描かれる Joseph Conrad のようなスタイルへと

傾向を変える (White 5-6)。植民地主義的冒険においてターゲットとなる「未開」の地とは、工業発展のための資源なり、製品の販路なりのメリットを与えてくれるはずのものであり、その獲得・支配への欲望は、セクシュアリティのアナロジーとして表れることが多く、顕著な例として *She* (1886) がある。冒険小説においては、「英雄」である冒険者がその目的物を獲得することで、植民地支配を価値意識として是認するとともに、ヴィクトリア朝以来⁽⁶⁾の男性性の称揚⁽⁷⁾も行ったのである。

3人の旅人が厳しい自然環境の辺境を少なくとも1ヶ月は馬に乗って旅を続けており、途中、物語の舞台となる主人公の女の住む小屋に立ち寄るというのが “The Woman at the Store” の舞台設定であり、この設定は矮小化された冒険小説の一場面としての資格を備えている。そして冒険者に女性が含まれ、しかも彼女が語り手であるという構成は、男性性賛美のメディアである冒険小説をパロディ化し、イギリス文学史において小さくない場所を占めているこのジャンルを揶揄している。

“The Woman at the Store” が冒険小説のパロディであることを示すのは、今述べた点においてだけではない。この物語の舞台を語り手は次のように語る。

It was sunset. There is no twilight to our New Zealand days, but a curious half-hour when everything appears grotesque — it frightens — as though the savage spirit of the country walked abroad and sneered at what it saw. Sitting alone in the hideous room I grew afraid. (13)

「この国の野蛮な霊がそのあたりを歩き回って見るものをあざ笑っているかのよう」な不気味さは、一人で座っていると恐怖を感じるほどのこの部屋の薄気味悪さとともに、主人公が夫を殺して埋めていたことが判明するという結末の伏線となっているだけではない。この地域がヨーロッパ文明の光が届かない「暗黒」、不気味な辺境であると規定することで、支配され啓蒙されるべき対象であるということを意味しているのである。“The Woman at the Store” にポストコロニアル的に臨むと、「不気味」な「暗黒」としての

辺境の旅というこの小説の設定は、「邪悪」な「野蛮」の地域に分け入っていくという冒険小説の常套的な設定と重なることに気付かされる。

Suzanne Raitt は、*Rhythm* に発表された “The Woman at the Store” では語り手の性別が曖昧であったのを、Mansfield の死後⁽⁸⁾、Murry が *Something Childish and Other Stories*⁽⁹⁾ を出版する際に⁽¹⁰⁾ 彼が語り手を女性となるように改変したと言っている (Raitt 157)。Els は毎日絵を描いていると Hin に話し、語り手が小川で水浴をするのを見たのでそれも描くと言っている。物語中盤でようやく語り手が女性であることが分かるこの場面は *Rhythm* においては次のようになっている。

“[...] I'll draw all of you when you're gone, and your horses and the tent, and that one” — she pointed to me — “with no clothes on in the creek.” I looked at her where she wouldn't see me frown. (16)

この箇所を Murry は次のように改変した。

“[...] I'll draw all of you when you're gone, and your horses and the tent, and that one” — she pointed to me — “with no clothes on in the creek. I looked at her where she couldn't see me from.”⁽¹¹⁾

こうして較べてみると、引用符の位置が変わることによって、引用箇所最後の文が誰の視点によるものなのかが、換言すると、“I” と “her” がそれぞれ誰を示すのが変わってくる。*Rhythm* の I looked at her where she wouldn't see me frown. は引用符の外にあるため、語り手の視点によるものにも読めるが、この frown に注意しなければならない。“The Woman at the Store” は Mansfield が 1907 年にニュージーランド北島の Urewera に旅行をしたときの記録⁽¹²⁾ に基づいており (Gordon, *The Urewera Notebook* 26-28), Daly は、“The Woman at the Store” の登場人物の語りにその地方の言葉が使われていると言い、また、“[...] Over and over I tells 'im — you've broken my spirit and spoiled my looks, and wot for [...]” (*Rhythm* 17) といった主人公の女の言葉から、Mansfield がその地の地方語を記録してい

たことは明らかだという指摘もしている (30-31)。“The Woman at the Store” では、語り手の視点による部分は標準的な英語で書かれ、from という言葉も物語中のほかの個所で再三使われていることから、この I looked at her where she wouldn't see me frown. (下線は引用者) は引用符の外にあるものの、語り手の声ではなく、現地の言葉を写したものか、子どものたどたどしい言葉の表現なのか、いずれにしても Els のそれであると考えるのが妥当である。つまり Murry が手を入れたことで、曖昧だった語り手の性別が女性になったということではなく、語り手は初めから女性であって、すでに述べた冒険小説のパロディとしての性質は、この短編が *Rhythm* に表れたときから存在していたのだ。

Murry の行った改変で本論が注意したいのは、旅人のうちの一人の名前がマオリ族によくある名前の Hinemoa の短縮形である Hin から Jim に変えられた (Raitt 157) ということである。Dunbar によると Hinemoa とはマオリ族の女性の名前だという (47)。さらに Dunbar は、もう一方の旅人の名前の Jo が女性的であるということも指摘している (47)。辺境の旅行者が、女性のような名前を持つ二人の男性と、物語中盤で女性であることが分かるまで (それでも that oneと言われており、女性であるという手がかりは非常に少ない) 男性であるかのような語り手の3人であるということを、Andrew Bennett は Mansfield 作品の登場人物にしばしば見られるジェンダーとセクシュアリティの決定不可能性、曖昧さの一例として挙げている (51-52)。こうしたジェンダーの曖昧さは既存のジェンダー観への疑問であり、冒険小説に見られる、英雄としての男性性／邪悪な女性性という、ジェンダー化された支配と征服の構図への抵抗でもある。

さらにこの物語の旅人たちは、冒険小説のヒーローたちのような「英雄」ではない。イギリス帝国主義が大きく発展したヴィクトリア朝においては、ジェントルマンであるということに高い価値が置かれており、通例、冒険小説のヒーローたちは理想的男性像としてのジェントルマンであった⁽¹³⁾。こうした男性性の称揚が思想面から帝国主義を支えていたということを念頭に置くと、Jo の軽薄な様子は、植民地への進出・支配が「英雄」の仕事であったという「伝統」の否定を意味する。

4年前までの主人公の女を知っている Hin は、Jo に彼女が金髪碧眼の美

女であり、「握手するまでもう何か別の約束をしてくれる」(8)と言ったために彼は期待を膨らませる。容姿が醜く変わり果て「怪奇」(11)なまでの姿となった彼女を見ても、Joは「夜の光で見ればましに見えるであろう」、「それでも女には違いない」(14)と言い、彼女の歓心を得ようとする。女性の獲得を目指すという点において冒険小説の要素が矮小化されて変奏されているのである。Joは主人公の女と一夜を過ごすことに成功したが、語り手とHinは、女が夫を殺して埋めたということをElsの絵で知る。二人は夜明けを待って小屋を後にし、Joだけが置いて行かれるというエンディングは、彼が主人公の女を獲得したというより、むしろ彼女の餌食になるのではないかという推測を誘う。すなわち、主人公の女はイギリスに利益をもたらすであろう「未開」の地の表象としての女性像ではなく、世紀末文学⁽¹⁴⁾や芸術に表れる、男を破滅や死に導く「宿命の女」⁽¹⁵⁾や、その一形態である女吸血鬼⁽¹⁶⁾であると言える。Oscar Wildeは1891年にフランス語で*Salome*を書きあげ、1893年に出版する。1897年の*Dracula*に先立って1872年に女吸血鬼物語*Carmilla*が表れ、絵画においてはラファエル前派が「宿命の女」を好んでテーマに取り上げた。こうした「宿命の女」の形象には、男性性に価値を置き、男性に対する脅威として女性を見る女性嫌悪(misogyny)の伝統が背景として存在することは確かである⁽¹⁷⁾。“The Woman at the Store”の主人公の女が部屋を片付け、花を飾り、彼女自身着替えてJoたち旅人を小屋の一室に招くという行為は、たとえ彼女が今は世紀末文学の「宿命の女」のような美女ではないにせよ、誘惑者としての女性という点で、「宿命の女」の流れを汲んでいるといえる。西海岸の酒場の女であった彼女がかつては「蠟人形のようにきれい」であって、Hinに「125通りのキスの仕方」(16)を知っていると語ったという。このことは彼女が「宿命の女」の系譜に並ぶことを示している。MansfieldがWildeなどの世紀末文学に傾倒していたことは知られているが⁽¹⁸⁾、ここで問題としているのは、作家Mansfieldが冒険小説や世紀末文学から直接的影響を受けたか否かということではない。“The Woman at the Store”がこれらのジャンルを作り上げた時代文化において生成されたテキストである以上、これまで見てきたようなイギリス文学のトレンドと無縁でいるということは不可能なのだ。イギリス文学の伝統の歴史的な磁力の方向決定力を、それに対して意識的であるか

否かにかかわりなく、テキストは必然的に受けているのであり、テキストとしての “The Woman at the Store” に及ぼしているその力の痕跡をここまで見てきたのである。

冒険小説が征服を試みる側から書かれているのに対し、“The Woman at the Store” の主人公は支配の対象となる地域に生きる女であり、語り手もニュージーランドの人間である。辺境の人々の言葉を小説中に用いるという「自然主義的手法」(Daly 30: Kobler 14, 58) は、帝国主義において沈黙を強いられる植民地民、特に辺境に暮らす人々の声を生かすという試みであるといえる。さらに、その名前からマオリ族の可能性もある Hin を登場させることで、イギリスからの入植者以外の存在への注目を示している。こうして帝国主義の文学的産物である冒険小説を逆方向から書き換えることで、そのイデオロギーへの抵抗をこの物語は示している。

“The Woman at the Store” は Murry によると 1911 年末に書かれたという (“Katherine Mansfield” 55)。この頃になると、小屋に貼ってあった雑誌のページが示すようなヴィクトリア朝の栄光は過去のものとなっていたし、イギリス帝国主義への絶対的信頼感が薄れるに従い、植民地への移住が経済的な安定を意味するという図式もあてにならないと分かってきていた。“The Woman at the Store” の主人公の女と夫は、ニュージーランド西海岸からこの辺境に移り住んで店を始め、周囲の草地に囲いをして野営地として貸してもいたらしい。4 年ほど前まで、つまり鉄道が建設される前は、2 週間に一度乗合馬車が店の近くを通っており、商売もうまくいっていたようだが、今となっては、やって来るのは「マオリ族と浮浪人」くらいなものだというし (14-16)、店は実質的には営業していない。支配する側から見た帝国主義への幻滅ではなく、植民地民のそれに目を向けたという点、しかもヨーロッパ中心主義による世界観においては周縁であるニュージーランドの、さらにまたそのニュージーランド内部においても周縁である僻地の人間の絶望に目を向け、帝国主義の暗部を告発しているのだ。

先に引用した箇所 “our New Zealand” という表現から、語り手がニュージーランドに帰属意識がある人間であることが分かる。しかしながら彼女が主人公たち僻地民とは違う言葉を話すことで、彼女がかれらとは別の社会的グループに属する人間だと分かる。つまり語り手はニュージーランドの人間

でありながら辺境の住民ではないのだ。こうした境界線上の語り手の存在は、イギリスの読者の理解と共感を誘う仕掛けであると同時に、文明／野蛮、中心／周縁、イギリス／ニュージーランドという世界観の二項対立を崩す突破口である。ジェンダー的アナロジーをも含んだ帝国主義的な諸対立項の交錯するところに存在し、その力関係の転覆を目論むテキストとして “The Woman at the Store” を捉えることによって、このテキストがイギリス文学の伝統に対するニュージーランドからの書き換えであるということが顕在化するのである。

《注》

- (1) “whare” とはマオリ語で家を示す語であるが、後にヨーロッパ人が原始的な小屋全般に対して使うようになった言葉である (Alpers, *The Stories of Katherine Mansfield* 551)。
- (2) “The Woman at the Store” は、「小屋の女」と訳されてきた (大澤；黒沢)。女が実際に住んでいるのは whare であり、店はその一部であるということを考慮したためであろう。日本語タイトルに関する同様の指摘は腹部 (371) にも見られる。
- (3) 以降, “The Woman at the Store” の引用は断らない限り *Rhythm*, Spring 1912: 7-21 による。
- (4) Raitt によると、安価なコーヒーの商標で、チコリが入っているという (158)。
- (5) 本論におけるポストコロニアリズムとは、ポストコロニアルな社会の内部で生産されたテキストの総体というよりも読みの実践のあり方として捉えるという姿勢 (Ashcroft, Griffiths and Tiffin 189-94) を言う。
- (6) ヴィクトリア朝冒険小説に関する詳細は Fraser によった。
- (7) ヴィクトリア朝の価値意識としての男性性の称揚については Houghton によった。
- (8) Mansfield の死は 1923 年 1 月 9 日。
- (9) *Something Childish and Other Stories* を Murry が Constable 社から出したのは 1924 年 8 月。
- (10) Murry が 1920 年 12 月に *Bliss and Other Stories* を発行するにあたって、Mansfield は同年 2 月 8 日の彼への手紙に, “The Woman at the Store” の転載はしないと書いている (Murry, *Katherine Mansfield's Letters* 471)。この手紙で Mansfield はその理由を語っていないが、Alpers は、ニュージーランド奥地における社会的文化的な隔絶をロンドンの読者は理解できなかったためであろうと考えている (*The Life of Katherine Mansfield* 155)。
- (11) Katherine Mansfield, “The Woman at the Store,” *Something Childish and Other Stories*, (London: Constable, 1924. Tokyo: Hon-No-Tomosha. 1990) 68.
- (12) これは Ian Gordon, ed. *The Urewera Notebook*, (Oxford: Oxford UP, 1978) および Margaret Scott, ed. *The Katherine Mansfield Notebooks*, (Minneapo-

lis: U of Minnesota P, 2002) で読むことができる。“The Woman at the Store”に関連していると考えられる箇所に関しては、この両者間で多少の相違はあるものの、本論では Mansfield の記録と作品の照応関係は論考の対象としないので、両者の異同に関しては触れない。だが、このような詳細な記録を付け、それを “The Woman at the Store” の執筆に生かしたということは注目に値する。

- (13) 冒険小説のヒーローと紳士に関しては佐野を参照されたい。また Haggard の冒険小説のヒーローが「何者にもましてイギリス紳士」であるという指摘もある (Katz 67)。冒険とは「紳士」の仕事なのであった。
- (14) ジェンダー観を中心とした世紀末文化の諸相については Showalter によった。
- (15) 「宿命の女」の様々な表象についてはプラーツを参照されたい。
- (16) 「宿命の女」と女吸血鬼の関連については森田による。
- (17) Dijkstra によると、世紀末の文学芸術におけるイマジネーションとしての女性には常に危険な存在であり、19 世紀末ヨーロッパにおいて文化的な女性嫌悪は頂点に達したという。
- (18) Mansfield と世紀末文学については手塚氏、三神氏の各論に教示を受けた。

引用・参考文献

(各項目中、日本語文献は英語文献の後に 50 音順に載せた。)

(1) Katherine Mansfield 関係

- Alpers, Antony. *Katherine Mansfield*. London: Cape, 1954.
- . *The Life of Katherine Mansfield*. Oxford: Oxford UP, 1982.
- , ed. *The Stories of Katherine Mansfield*. Auckland, Oxford UP, 1984.
- Bennett, Andrew. *Katherine Mansfield*. Tavistock: Northcote; British Council, 2004.
- Berkman, Sylvia. *Katherine Mansfield: A Critical Study*. New Heaven: Yale UP, 1951.
- Daly, Saralyn R. *Katherine Mansfield*. Rev. ed. New York: Twayne, 1994.
- Dunbar, Pamela. *Radical Mansfield: Double Discourse in Katherine Mansfield's Short Stories*. London: Macmillan P, 1997.
- Gordon, Ian A. *Katherine Mansfield*. London: Longmans; Green, 1954. Rpt. in *Writers and Their Works*. c1963.
- , ed. *The Urewera Notebook*. Oxford: Oxford UP, 1978.
- Gubar, Susan. “The Birth of the Artist as Heroine: (Re)production, the *Künstlerroman*, and the Fiction of Katherine Mansfield.” Heilbrun, Carolyn G., Margaret R. Higonnet, eds. *The Representation of Women in Fiction: Selected Papers from the English Institute, 1981*. Baltimore: John Hopkins UP, 1983. 26-29. Rpt. in Pilditch 195-97.
- Hankin, C. A. *Katherine Mansfield and Her Confessional Stories*. London: Macmillan. 1983.

- "Katherine Mansfield's Stories." *The Times Literary Supplement*. Mar. 2, 1926. 102. Rpt. in Pilditch 58-53.
- Kobler, J. F. *Katherine Mansfield: A Study of the Short Fiction*. Boston: Twayne, 1990.
- Mansfield, Katherine. "Millie" *Something Childish and Other Stories*. 90-98.
- . "Ole Underwood." *Something Childish and Other Stories*. 76-82.
- . *Something Childish and Other Stories*. London: Constable, 1924. Tokyo: Hon-No-Tomosha. 1990.
- . "The Woman at the Store." *Something Childish and Other Stories*. 58-75.
- . "The Woman at the Store." *Rhythm*. Spring 1912: 7-21.
- Murry, John Middleton. "Katherine Mansfield." Pilditch 53-66. Rpt. of *Katherine Mansfield and Other Literary Portraits*. London: Nevill, 1949. 71-93.
- , ed. *Katherine Mansfield's Letters to John Middleton Murry, 1913-1922*. London: Constable, 1951.
- New, W. H. *Reading Mansfield and Metaphors of Form*. Montreal: McGill-Queen's UP, 1999.
- Pilditch, Jan ed. *The Critical Response to Katherine Mansfield*. Westport: Greenwood, 1996.
- Porter, Katherine Ann. "The Art of Katherine Mansfield." *The Nation*. Oct. 23, 1937, vol. 145. 436. Rpt. in Pilditch 45-47.
- Raitt, Suzanne. Notes. *Something Childish and Other Stories*. By Katherine Mansfield. Harmondsworth: Penguin, 1996. 150-72.
- Scott, Margaret ed. *The Katherine Mansfield Notebooks*. Minneapolis: U of Minnesota P, 2002.
- Smith, Angela. *Katherine Mansfield: A Literary Life*. New York: Palgrave, 2000.
- Stead, C. K. "Katherine Mansfield and Art of Fiction." *The New Review*. No. 4, Sept. 1977. 27-36. Rpt. in Pilditch 155-172.
- Wagenknecht, Edward. "Katherine Mansfield." *The English Journal*. Apr. 1928, 17: 272-84. Rpt. in Pilditch 19-27.
- Wevers, Lydia. "How Kathleen Beauchamp Was Kidnapped." *Women's Studies Journal*. 4: 2 (Dec. 1988) 5-17. Rpt. in *Critical Essays on Katherine Mansfield*. Ed. Rhoda B. Nathan. New York: G. K. Hall, 1993. 37-47.
- 大澤銀作, 他訳『マンスフィールド全集』新水社, 1999.
- 黒沢茂訳『マンスフィールド全集』第1巻 垂水書房, 1996.
- 手塚裕子「キャサリン・マンスフィールドの青春」『川村短期大学紀要』第10号, 1990. 37-45.
- 腹部千代子「ニュージーランド辺境を語る植民地文学——キャサリン・マンスフィールドの『小屋の女』」竹谷悦子, 長岡真吾, 中田元子, 山口恵里子編『英語圏文学: 国家・文化・記憶をめぐるフォーラム』人文書院, 2002. 365-79.
- 三神和子『キャサリン・マンスフィールド: 世紀末, モダニズム, 芸術家』辞游社,

2000.

- (2) 冒険小説および吸血鬼, 「宿命の女」に関する文学作品——本文中言及した文学作品の使用テキスト——およびこれらの文学作品に関する評論

Ballantyne, R. M., *The Coral Island: A Tale of the Pacific Ocean*. Oxford: Oxford UP, 1990.

Conrad, Joseph. *Lord Jim*. London: Penguin, 1986.

Defoe, Daniel. *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner*. Oxford: Oxford UP, 1983.

Haggard, Rider. *Allan Quatermain*. Oxford: Oxford UP, 1995.

———. *King Solomon's Mines*. Oxford: Oxford UP, 1989.

———. *She*. Oxford: Oxford UP, 1991.

Katz, Wendy R. *Rider Haggard and the Fiction of Empire*. Cambridge: Cambridge UP, 1987.

Le Fanu, Joseph Sheridan. “Carmilla.” *Best Ghost Stories of J. S. Le Fanu*. Ed. E. F. Bleiler. New York: Dover, c1964.

Stevenson, Robert Louis, *Treasure Island*. Oxford: Oxford UP, 1984.

Stoker, Bram. *Dracula*. Oxford: Oxford UP, 1983.

White, Andrea. *Joseph Conrad and the Adventure Tradition*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.

Wilde, Oscar. *Salome*. London: Heinemann, 1957.

佐野 晃「冒険小説を通して見るイギリス紳士像と大英帝国」『武蔵大学人文学会雑誌』第26号第3巻 1995. 192-215.

- (3) ポストコロニアル, 女性嫌悪, ヴィクトリアニズム関係

Ashcroft, Bill, and Gareth Griffiths, Helen Tiffin. *The Empire Writes Back: Theory and Practice in Post-Colonial Literatures*. London: Routledge, 1989.

Dijkstra, Bram. *Idols of Perversity: Fantasies of Feminine Evil in Fin-de-Siècle Culture*. New York: Oxford UP, 1988.

Houghton, Walter E. *The Victorian Frame of Mind, 1830-1870*. New Haven: Yale UP; London: Oxford UP, 1957.

Showalter, Elaine. *Sexual Anarchy: Gender and Culture at the Fin de Siècle*. London: Virago, 1992.

ブラーツ, マリオ著, 倉智恒夫, 南條竹則, 草野重行, 土田知則訳『肉体と死と悪魔』国書刊行会, 1991.

森田秀二「物語とは何か(4): 物語パターンの研究: 幻想物語(2)吸血鬼物語」『山梨大学教育人間科学部紀要/山梨大学教育人間科学部編』, 3(2), 87-97, 2001.

Katherine Mansfield's "The Woman at the Store" and Post-Colonialism

Rieko Sakakibara

Abstract

Although Katherine Mansfield's "The Woman at the Store" (1912) is originally published in London, this short story, based on her experience of a trip in the Urewera district of the North Island of New Zealand in 1907, shows her concern for British imperialism and colonialism, focusing on the life of a woman and her daughter in the backdrop of New Zealand, not from the viewpoint of the colonial masters but from that of the narrator, who belongs to the country. Reading "The Woman at the Store" from the post-colonial perspective, this paper is intended to demonstrate that the text subverts cultural and political monocentrism found in English literature. The work is to rewrite the established notion of the interrelationship between the imperial power and the colony, that is, Europe and the Antipodes, the Eurocentric understanding of the world during the period of imperialism, and the accepted gender ideology playing on the tradition of adventure fiction and of its hero worship, and the framework of the representation of the femme fatale in the fin-de-siècle literature, which conspire with the ideology of the imperialism.